

日本YMCA基本原則

私たち日本のYMCAは、イエス・キリストにおいて示された愛と奉仕の生き方に学びつつ世界のYMCAとのつながりのなかで、次の使命を担います。

私たちは、すべての人びとが生涯をとおして全人的に成長することを願い、すべてのいのちをかけがえのないものとして守り育てます。

私たちは、一人ひとりの人権を守り、正義と公正を求め、喜びを共にし痛みを分かちあう社会をめざします。

私たちは、アジア・太平洋地域の人びとへの歴史的責任を認識しつつ、世界の人びとと共に平和の実現に努めます。

2014年4月1日発行（毎月1日発行）
昭和22年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料60円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区本塩町7
TEL：03-5367-6640 FAX：03-5367-6641
URL：http://www.ymcajapan.org/
発行人／島田 茂 編集人／山根 一毅
印刷／あかつき印刷株式会社

人間として豊かに育つことを願い

江東区子ども家庭支援センター「みずべの会」代表

新澤 誠治



私は、下町にある木造の園舎に十字架が高くそびえるキリスト教主義の保育園の園長を40年務めた後、東京都江東区の子育て支援センター「みずべ」の所長を3年務め、その後、東京YMCAの事務所を借り、かつての職場や保育園、学童保育の相談役を務めてきました。長い間、定点観測のように子どもの姿や環境の変化を見つめ、子育て、子育て支援に関わってきました。

私が園長に就任した昭和33年は、東京タワーが建設され、それが高度経済成長が始まる号砲のように情報社会やコンクリート社会が進みましました。道路は舗装され、自動車^{ぼつこ}が跋扈し、空き地や野原にはマンションが建ち、下町独特の「向こう三軒両隣り」の世界は消えていきました。時間を忘れて遊んでいた子ども達の姿や、地域の中で子どもを見守り、時に声を掛ける大人の姿が見えなくなり、むしろ子どもの声がうるさいという人が出てくるようになりました。何よりも気掛かりなのは、競争社会が広がる中で親達は子どもの将来を案じて、生きる力をつけるためには「頭のよい子」「できる子」にならなければと信じ、「勉強、勉強」と子どもを追いこみ続けていることです。

私が思うキリスト教保育とは、神様から子ども一人ひとりに「育つ種」が与えられていると信じることです。土壌となる環境をつくり、

愛情の水を注ぐことで、育つ種が大きく芽を吹き、大樹となり、人間として豊かに育っていくのです。このことを実現するためには、次の3つのことが大切だと私は思います。

①子どもは、赤ちゃんの時から両親や祖父母、近隣の地域の人に生まれたことを祝福され、成長を見守られ、愛の言葉を掛けられることが大切です。できるだけ多くの人からの「祝福のシャワー」を浴びてこそ、人間らしく育ちます。

②子どもの「できる・できない」にこだわるのではなく、乳児期・幼児期・学童期に体験すべきことを十分に味わうために、遊ぶことを基本として、養護と教育の両面から年齢にふさわしい体験を積み重ねることが重要です。

③子どもの「いのち」が大切に育まれ、人間らしく育つためには、人と交わり、自然と親しみ、豊かな文化に囲まれて、神に支えられて生きる自覚がもてることが大切です。人・自然・文化・宗教との総合的な関係の中で子ども達は豊かに育ちます。

YMCAは、子ども達に本当の意味での「生きる力を育てる場」であり、乳児から青年期までをつなげて教育する機能と、総合的な関係をつくりだす力を持っています。今後これらに、ますます力を注がれることを期待します。

ラポール

相手と向き合って心を合わせていくこと。
(仏語:親和・共感的関係の意)

人を支える大きな力

日本バプテスト連盟
常務理事

吉高 叶

私の心に焼き付いている風景があります。ハンカチを振る一人の老婦人の風景です。彼女・芥今世（あくたいまよ）さんは、子どものころにハンセン病を患い、瀬戸内海の大島（国立ハンセン病療養所「大島青松園」）で生きてこられました。発病とともに大島に隔離収容され、それから60年以上も島に閉じ込められるようにして生きてこられたのです。芥さんは、後に島に建てられたキリスト教会に通い始めクリスチャンになりました。

私は、高校生の時に初めて大島の教会を訪問しました。社会から切り捨てられ、想像を絶する苦しみを味わった人達の礼拝とはとても信じられない、抜けるように爽やかで、力強い賛美と感謝にあふれた礼拝でした。訪問した私達のほうが励まされて帰ってきたのです。それ以来、私は時折、渡し船に乗って大島を訪ねるようになりましたが、芥さんはいつも船着き場に迎えに来てくださるのです。船がまだ遠くにいる時から、船着き場の突堤の先でハンカチを振って迎えてくれます。ハンカチに縫い付けたゴム輪を、病気の後遺症で丸まってしまった手の手首にはめて、曲がった腰を一生懸命伸ばして、船が着岸する

までずっと振り続けてくれるのです。芥さんの振るハンカチが見えると胸がキュンとして「ああ、来て良かった～」と思うのです。

夕方、高松に戻る時刻には、わざわざ棧橋に見送りに来てくれて、いつまでもハンカチを振り続けてくれるのです。そのハンカチを見ていると、また胸がキュンとします。「また、来たいな～」って感じるのです。なんなのでしょう、この芥さんの力って……。手を左右に振るだけの動作を、普通なら能力とか技能とは呼びません。でも、芥さんの振るハンカチの風景は、心に焼き付き、今なお慰めとなり、時に心を熱くし、励ましてくれる、大きな力なのです。

人間が人間を支えていく力。助けていく力。それは、きっと、誰もが分かるすごい力とか、多額の資金とか、壮大なシステムとか、そんなものじゃなく、もっとささやかで、人の弱さや悲しみを知っている優しさから生まれ出ているものなのだと思います。

「3.11東日本大震災」を経験し、人が本当は何によって支えられているかを深く考え始めた私達の誰もが、きっとそのことに気づき始めているのではないのでしょうか。

食 YMCA保育園

神戸YMCA 石田 由紀 (栄養士)



園内の畑で収穫された野菜や果物は子ども達の食卓に

「きょうのごはんはなにかな」と言いながら登園してくる子ども達、「わぁ〜今月は春巻きが出るんだ！」と献立表を見て歓声を上げる職員……。YMCA保育園は、子どもも大人も食べることが大好きです。

春はイチゴ、夏は夏野菜、秋はサツマイモ、冬は葉物や根菜……と四季折々の栽培と収穫を楽しめる園内の畑。その他、ブドウ、カキ、ピワが実り、収穫した食材がその日の食事に出た時の子ども達の表情は特別です。

見て、触って、匂って素材に出合う1〜2歳児。3歳児以上はお団子やスイートポテト、パンやパンケーキ等を調理するだけでなく、魚の3枚おろしや炭火でサマを焼く等、「見るクッキング」も楽しんでいます。

また、子ども達の毎日の食事には、野菜や魚を多く取り入れ、原材料が分かる手作り料理を心掛けています。特に、1週間前から約15種類の香辛料を合わせて熟成させたルーで作るカレーは、YMCA保育園の特製です。

毎月の誕生会には、おせち料理や郷土料理等、日本の食文化や行事食を取り入れています。重箱やトレーを使って、目でも楽しめるよう盛り付けにも工夫をしています。子ども達の「わぁ〜!!」という声はとてうれしく「来月も!!」という力になります。国際DAYでは、諸外国のお客様から教えていただく異文化料理にも挑戦します。「この食材、どこで手に入るのかな」「この味でいいのかな」と悩んだ時は「〇〇料理の店が三宮にあるから食べに行こう」と国際都市神戸ならではの食文化にも助けてもらっています。「辛〜!!」「手で食べるの?」「ジュースが水がわり?」等々、興味津々の子ども達の感想はとて正直です。

中学生の職場体験や、実習生・保育士として園に戻ってくる卒園児の一番の思い出は、園の食事やおやつです。「これ好きやった!」「これ覚えてる!」といううれしい言葉に、栄養士として頬が緩んでしまいます。10年後、20年後の社会を支える子ども達の人生を歩む力、生きる力となる食事をこれからも大切に、子ども達の「きょうのごはんはなにかな」という声が響く保育園でありたいと思います。



YMCAは全国143の拠点で、チャイルドケア(保育園・幼稚園・こども園・児童館・学童保育等)を行っています。



YMCA松尾台こども園

大阪YMCA 山地 弘伸 (スタッフ)

大阪YMCAのこども園では、幼児期における「からだ」の発達に重点を置き、「からだ」の発達から「こころ」の発達へとつなげることを大切に、38年前から子ども達の健康教育に力を注いでいます。日常生活は「はだし保育」を中心に、YMCA体育専門スタッフと保育担当者とのチームワークのもと、体育・水泳活動を重視。さらに、大学研究機関とも連携し、体力測定、土踏まずの形成測定、骨密度測定、薄着の奨励等、子ども達の将来を見据えた健康教育の向上に取り組んでいます。

何よりも外でしっかりと体を動かすことや遊ぶことは、子ども達にとって楽しみの時間となっています。体育の時間が終了して、終わりのあいさつをしようとする、「もう少しやりたかった」「今度は、いつ?」という声が毎回聞かれます。保護者の方からも、「体育・水泳がある日は、早く起きて自分から園に行く用意をしています」と声を掛けられたこともあり、こうした活動が子ども達の自立にも役立っていることをうれしく思っています。

私には、日々の体育指導に携わる上で、繰り返し振り返る大切な言葉があります。それは、水が苦手な半年間をプールサイドで過ごした、ある卒園生の女の子からもらった手紙にあった言葉です。中学校で水泳部のキャプテンとなり、インターハイ出場を目指して日々練習に励んでいることをつづけたその手紙の最後には、「今の自分があるのは、幼稚園で焦らず、ゆっくりと見守ってくれた先生達のおかげです。水泳が一生涯チャレンジできる大切なものになりました」とありました。

これからも、子ども達の主体的な「やりたい」「やってみよう」と思えるような心の動きを引き出すことを大切に、自分を見つけようと必死に旅を始めている子ども達を背後からそっと見守り、励まし続けたいと思います。



子ども達も大好きな体育の時間

地域の中で、子どもと一緒に YMCAとチャイルドケア

自然の恵みを喜ぶ気持ち。違いを認めて楽しむ心。自分を信じてチャレンジする力ー子ども達の持つ力は豊かで自由自在。そんな子ども達の健やかな成長は、地域や地球の未来を明るくします。

今日の子供達を取り巻く環境は、少子化・核家族化の進行や地域コミュニティの変容、夫婦共働き家庭の増加等、さまざまな社会の変化を受けて多様化しています。その中でYMCAは、子ども達が地域の中で伸び伸びと育っていくことを願い、チャイルドケアに取り組み続けてきました。今号では、全国各地で子どもの成長と向き合うスタッフの声を紹介します。



YMCAいずみ保育園

横浜YMCA 松井 リリアン (保育士)



リリアン先生と夏野菜のピザ作り

YMCAいずみ保育園がある地域には外国籍の方が多く、園児の2割以上が外国にルーツを持っています。異文化が出合う場所には、思いがけないトラブルはつきものです。例えば、あるカンボジア人のお母さんに、「運動会」という行事があり、お弁当を持参して応援に来てほしいと伝えましたが、保護者参加競技があるとは想定していなかったお母さんは当日ハイヒールで運動会へいらっしゃいました。翌年からは運動しやすい靴のことも伝えるようにしています。

子ども達の中には、日本語の他にベトナム語やカンボジア語、中国語を話すバイリンガルもいます。そういった子ども達には、日本語の分からない入園間もない子どもとスタッフの間で通訳をお願いすることもあります。すると、他の子ども達も日本語が分からないお友達がいることを理解してジェスチャーを使ったり、手を取って手洗いや食事の準備を伝えたりしながら、コミュニケーション方法を工夫するようになります。また、子ども達に、あえて外国語で掛け声を掛けることもあります。そうした日常の中で、子ども達はさまざまな国の言葉があること、違いがあることを少しずつ理解していきます。

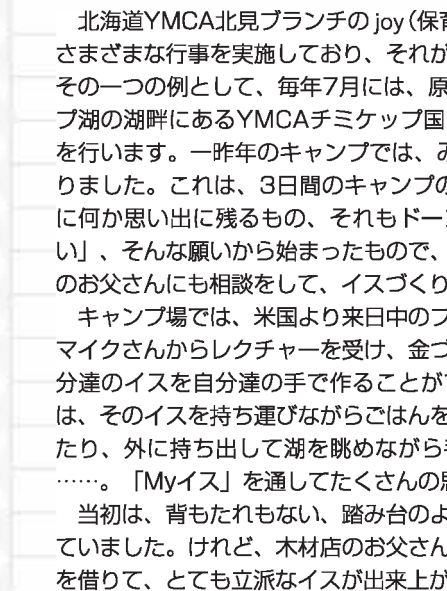
また、食事にも外国の文化を取り入れています。子ども達に人気のメニューは、ベトナムのチューと中国の水餃子。チューはタピオカと黒豆をココナッツミルクで煮た甘いデザートです。なじみのない味に初めは完食できなかった子どもも、今では元気におかわりをしています。水餃子の日には、毎年中国出身のお母さん達から家庭の味を伝授してもらいます。皮から作るので日本人のお母さん達の協力も欠かせませんが、こうした行事は保護者間の交流の場でもあります。

さらに当保育園には、ベルー出身の私を含め、外国にルーツを持つ保育士も働いています。顔も名前もみんなとは少し違う、時々おかしな日本語を使う私ですが、子ども達もスタッフも「ありのまま」を受け入れてくれます。結婚で名字が変わった時、「名前が変わってもリリアン先生はリリアン先生だね」とある保護者の方に言われ、とてもうれしく思いました。違いがあるのは当たり前で、それは面白いこと。そんな毎日をこれからも子ども達と過ごしていきたいです。



joy (保育園)

北海道YMCA 西亭 ひとみ (スタッフ)



キャンプでは本物のアイスづくりを体験

北海道YMCA北見プランクのjoy(保育園)では、年間を通じてさまざまな行事を実施しており、それが園の特徴でもあります。その一つの例として、毎年7月には、原始林に囲まれたチミケップ湖の湖畔にあるYMCAチミケップ国際キャンプ場でキャンプを行います。一昨年のキャンプでは、みんなで「Myアイス」を作りました。これは、3日間のキャンプの中で、「子ども達と一緒に何か思い出に残るもの、それもドーンと大きいものを作りたい」、そんな願いから始まったもので、木材店を経営する卒園生のお父さんにも相談をして、アイスづくりの段取りを整えました。キャンプ場では、米国より来日中のプログラムディレクターのマイクさんからレクチャーを受け、金づちと格闘しながらも、自分達のアイスを自分達の手で作ることができました。キャンプ中は、そのアイスを持ち運びながらごはんを食べたり、記念撮影をしたり、外に持ち出して湖を眺めながら手作りのピザを食べたり……。「Myアイス」を通してたくさんの思い出ができました。当初は、背もたれもない、踏み台のような小さなイスを想定していました。けれど、木材店のお父さんやマイクさんの知恵や力を借りて、とても立派なアイスが出来上がりました。一人の力だけではうまくいかないことや実現できないことも、いろいろな人の力を借りると素晴らしい何かへとつながっていくことを、子ども達と一緒に実感できる経験となりました。また何より、子ども達の小さな手に見合った物を作るのではなく、子ども達が本物のアイスづくりを体験できたことをうれしく思います。その原石は原石です。その原石を光らせるためにいろいろな経験の場をたくさん持ち、その環境の中で子ども達が豊かに成長していきたくれればと願っています。

繋がる 学童保育「うのクラブ」

YMCAせとうち 市川 愛 (スタッフ)

地域の中で、地域の人達と共に、「子ども達の「響き愛のこころ」が育つ場をつくる。これが私達YMCAせとうちが目指す学童保育です。現場は日々「順調に」問題だらけ。ただし、「問題から逃げるのではなく、みんなの力で解決を目指す」、それが私の担当する学童保育「うのクラブ」のモットーです。

YMCAせとうちは、岡山市立宇野小学校内にある学童保育「うのクラブ」を連合町内会長や学校長等と組織された運営委員会と共に協働運営しており、「うのクラブ」では毎日1〜6年生の子ども達約150人が、生活を共にしています。

YMCAが協働運営を始めた最初の年、ある1年生の女の子が、運動場で一人で泣いていました。なぜ泣いているのかを尋ねると、自分の住んでいるマンションの方向を指さして、「あそこに今、妹とお父さんがいるんだけど…悪い人が来て、殺されちゃうかもしれない。怖い」と言うのです。実際そんなことはなかったのですが、今の子ども達は、常にテレビなどによる暗いニュースや保育園や学校から「知らない人には付いて行かない」等の指導を受けることで、知らず知らずのうちに小さな心は、「不安」と大人への「不信感」でいっぱいになっているのだと気がきました。

そこで、運営委員の皆さんと話し合った結果、共に「地域の子も達は地域で守ろう」ということになり、町内会を主体とする「うのっこパトロール隊」が組織され、毎日の登下校時に子ども達を見守ることになりました。「子ども達に地域の大人達から守られていることを実感してほしい」「大人を、地域の力を信じて安心して大きくなってほしい」。そんな願いを持って、私達は日々保育にあたっています。

また、子ども達自身が自分の住んでいる町に関心を持ち、地域の一員であることを実感できるように一緒に「町の落書き消去活動」等にも取り組んでいます。最近では、放課後こども教室「水辺の楽校」の運営や、宇野学区のお父さんを中心とする会「うのババ」の設立、学校内のコミュニティハウスの運営補助等、学童・学校・地域と一緒に活動する場におけるYMCAの役割が増えてきました。今後も、地域に必要とされる一員として活動していきたいと願っています。



「落書き消去活動」で地域に貢献

NEWS
各地の動きをご紹介します。

●102歳の現役医師・日野原重明氏、
スペシャルインタビュー — 熊本YMCA



「自分の健康状態に関心を持つことが元気で長寿の秘訣」と語る102歳の日野原重明先生

2013年12月3日、102歳の現役医師でYMCAとのつながりも深い日野原重明先生より、ご自身の健康の秘訣や健康づくりの大切さについてお話を伺いました。このインタビューは、熊本で開催された日野原先生の講演会において、先生考案の健康体操の実技指導をYMCAスタッフが担ったことがきっかけで実現しました。

1954年に日本で初めて人間ドックを提唱し、また「成人病」から「生活習慣病」への改名を実現された日野原先生。今回のインタビューでは、心と体の健康づくりや、自分自身の健康状態に関心を持つことの大切さを中心にお話いただきました。日野原先生は、30歳の時の体重60キロを現在も維持されています。自ら小まめに体重を測り、変化があれば食事や運動で調整することを心掛けることが、誰にでも取り組める元気で長寿の秘訣の一つと語られました。また、精神衛生を保つことも健康づくりには欠かせません。特に、勉強や仕事で緊張状態が長時間続くこと心のバランスが崩れがちです。ゆっくりと呼吸をしたり音楽を聞いたりしながら、一日のうちにリラックスできる時間を必ず持つことの大切さも指摘されました。

日野原先生は、現在約10日に1回のペースで小学校を訪問し、「いのちの授業」を行われています。先生曰く、「いのち」とは、「自分が使える時間」のこと。「幼い時に、自分の時間を自分が大人になるために使うのはいい。しかし成長したら、自分の時間を誰かのために使うことが必要」と先生はおっしゃいます。さまざまな観点から、より良く、より健康に生きることを伝え、自らも実践されている日野原先生の生き方に学び、YMCAはこれからもさまざまなプログラムを通して、人びとの生涯を通した心と体の健康づくりに取り組んでいきたいと思えます。

(熊本YMCA 中村 賢次郎)

●インタビューの動画は下記のウェブサイトでご覧いただけます
<http://www.kumamoto-ymca.or.jp/portal/8408.html>

●全国YMCAウエルネス担当者会講演会

1月29日、全国YMCAウエルネス指導者資格制度の推進と強化を目的に、ファカルティ養成講習会を東京YMCA社会体育・保育専門学校を会場に開催しました。このウエルネス指導者資格制度は、YMCAのウエルネスプログラムと指導者の質の向上、指導内容の全国標準化、さらにはYMCAブランドを継承していくことを目的としています。



コーチングの真髄を再確認する場となったスタッフ対象の講演会「コーチングに暴力はいらない」

今回の講習会には、関西学院大学名誉教授の武田建氏を講師に迎えました。武田先生は、関西学院大学のアメリカンフットボールチーム「ファイターズ」の監督として甲子園ボウルで5連覇を達成。中高校生時代は神戸YMCAの余島キャンプ場のキャンパーであり、大学生になってからはリーダーとしても活動されていました。今回は、ご自身の監督時代のご経験から、「コーチングに暴力はいらない」というテーマでご講演いただきました。

監督就任当時、武田先生は自分の指示通りにプレーできない選手や失敗した選手に対しては、大声で怒鳴り、また厳しく叱ったそうです。ところがある日、選手が叱られることに萎縮して伸び伸びとプレーをしていないこと、フットボール自体を楽しんでいないことに気づき、自らの指導法を180度転換。叱ることをせず、指導した通りにできた選手には進んで「良くなった」や「進歩したよ」と声掛けを行ったところ、上達を早める結果となったそうです。続いて、取り組まれたのが、「ちょっとした進歩を大切に」「達成可能な目標から」「一歩ずつ、難しいことでも、小さな部分に区切ってやれば、誰でもできます」「できるようにになったら、次第に目標を高くしましょう」ということでした。

ただ、武田先生は褒めるコーチングを提唱されていますが、叱ることを全否定されているわけではありません。叱るときには、「駄目じゃないか」と言うだけではなく「どうすればいいのかを具体的に伝え、少しでもできたらすぐに褒めましょう」と話されました。YMCAが大切にしたいコーチングの精神をあらためて確認し、共有する場となりました。

(日本YMCA同盟 田尻 忠邦)

●チャリティーコンサートでインド・ランチYMCAを支援 — 京都YMCA

京都YMCAでは、パートナーシップを結ぶインドのランチYMCAが長年支援活動を行うハンセン病患者とその家族の住むコミュニティーへの支援を目的に、毎年1月下旬～2月初旬にかけてチャリティーコンサートを実施しています。今年は1月25日に京都府民ホール・アルティにて開催しました。益金の一部は、京都YMCAの公益活動を支える募金にもなっています。

今回は、京都で初めて結成された本格的な邦楽アンサンブル「みやこ風韻」に出演協力を依頼しました。「みやこ風韻」には20人以上の団員が所属していますが、その中から団長および副団長を含む5人のメンバーに、箏・尺八・琵琶の演奏をしていただきました。普段あまり耳にする機会のない邦楽の演奏会ですが、古典的な曲目から現代的なオリジナル曲、そして世界の民謡までも含む、盛りだくさんなバラエーションに富んだステージでした。

17弦、20弦と曲目に合わせて箏を変える演奏者のテクニックや、最後の全員そろった迫力のあるアンサンブルには、会場全体が引き込まれました。来場者の方からも、「なじみの薄い邦楽だったけど、その魅力をあらためて知ることができた」との感想が寄せられました。

一方、「みやこ風韻」の演奏を目的に来場された方の中には、インドYMCAを通じたハンセン病とその家族に対する支援活動のことを会場でも知り、募金をしてくださる方が多くいました。

(京都YMCA 加藤 俊明)



箏・琵琶・尺八のアンサンブルに会場全体が引き込まれた

●中央アジア・コーカサス地域の青年
研修を受託 — 北海道YMCA

北海道YMCAでは、国際協力事業の一環としてJICA青年研修の受け入れを毎年行っており、今年も2月5～17日に、キルギス・タジキスタン・ウズベキスタン・アゼルバイジャンの計4カ国の青年14人が来道。2週間にわたり職業訓練教育に関する研修を行いました。

毎回受託研修では、北海道被爆者協会を訪問し、被爆者の経験談を聞いて平和について考える講義から始めています。専門に関係なく、これからの国づくりを担う青年達には、平和を第一に考えられる人材となってもらうことが重要と考えるからです。続いて、学校における職業教育、企業が行う社内研修、公的機関が行う就労支援・職業訓練制度等についての講義を受けた後、大学・専門学校や、優れた人材育成を行っている企業を訪問して実際の職業訓練の様子を視察しました。他にも、武道体験や着物の着付け、日本画とアイヌ古式舞踊の鑑賞等を通して日本の伝統的な文化や風習について理解を深めてもらいました。

来日した青年達は、イスラム教徒であり、キリスト教を基盤とするYMCAとは宗教が異なります。けれども、これまで15年以上イスラム教徒の青年を受け入れてきて、宗教の違いによるトラブルはほとんどありませんでした。豚肉を食べないことをはじめ、イスラム教の戒律によっていくつか禁止されていることはありますが、それ以外は私達と変わらない生活をしています。

マスメディアからはイスラム教に関する誤ったイメージが伝わることも多いのですが、彼等と実際に接していると、礼儀正しく、おおらかで、相手を思いやる心を持った青年達であることが分かります。例えば、研修中に誕生日を迎えたある青年のために、皆が集まりお祝いの会がもたれ、一人ひとりが祝福の言葉を述べる場面に出会いました。相手に対する尊敬の思いを言葉と行動で表現する姿勢は、日本の青年達も学ぶべき点の一つです。



中央アジア・コーカサス地域から青年14人が来道。研修を受託した北海道YMCAのスタッフと専門学校生と交流する場面も

これまで300人以上のイスラム教の青年達と出会い、宗教の違いを乗り越えることの意味を私自身教えられ、またキリスト教と自らの信仰を見つめる良い機会を与えられました。研修を通じて、日本と中央アジア・コーカサスの友好関係をさらに深めていくため、これからも青年研修の受け入れを続けていきたいと思えます。

(北海道YMCA 佐藤 雅一)